

I 広島社会科のめざすもの

1 広島社会科の研究の歩み

広島社会科は、創設以来一貫して、「学ぶことが楽しい」、「意欲的に学ぶ」、「活動や体験を楽しむ」、「豊かな表現をする」、「ふりかえり、工夫する」、「関わりを大切にする」というような子どもたちの育成をめざしてきた。「学ぶ喜びがあり、考え、地域の事象や人物から学ぶ社会科」の実践研究を積み重ね、その成果を絶えず全国に発信し続けてきた。

平成4年の全国大会では、『人間の生き方にせまり、自ら学ぶ力を高める社会科学習ー具体的な活動や体験を通してー』という研究主題を掲げた。具体的な活動を通して、思考、判断、表現できる能力の育成を図るといった新しい学力観に立つ社会科教育のあり方を提案した。

また、3度目の開催となった平成17年の全国大会では、『豊かに感じ 深く考え ともに高まり合う社会科学習ーよりよい社会をつくるために、考え、判断する子どもをめざしてー』を研究主題に掲げた。問題解決のための思考力・判断力を育むために、出会いと発見、感動のある学習材を開発すること、そして子どもたち自らが問いを見つけ、調べて考え、表現し、仲間とともに考えを深めていく社会科学習を提案した。その提案は参加者の多くの賛同を頂くことができた。

平成17年以降も、これまでの研究主題を引き継ぎ、「自らの意思で社会をつくっていく」という意欲と「その社会を維持し、発展させていく資質や能力」を身につけた子どもたちを育成するために、人間の思いに共感する心情を豊かにする授業、多面的に考えたり判断したりする授業、社会的事象と関わり、その意味や背景を追究していく中でともに高まり合う授業をめざし研究実践を行ってきた。

2 「広島社会科」が育む力

社会の変化と共に、それぞれの時代が要求する学力観も変化していく。広島社会科も、先述のように時代とともに研究主題を変え、これまで多くの実践研究を積み重ねてきた。しかし、変わらず大切にしてきたことがある。広島は国際平和文化都市であり、広島に生まれ育った子どもたちが10年後、20年後に大人になったとき、平和で豊かな社会を実現するために、必要な力を育成することである。本研究会顧問 広島大学大学院教育学研究科教授 小原友行先生は、この力を「国際平和文化創造力」とした。それは「学習指導要領が求める4観点別目標を基にして、平和な国際社会を形成していくための5番目の観点となる力であり、平和な国際社会を構築し、人のために尽くしていくために必要な『平和な国際社会の実現をめざして世界の人々と交流していくための力』、『共通の目的に向かって異なる他者と関わりながら、新しい平和文化を創造していく力』、『人と人との関わりを生み出していく力』の三つの力が含まれる」と述べている。これらの力は、どのような時代に生きようとも、どこの国に住もうとも、人間として普

遍的に大切な資質や能力である。

では、なぜこのような力が「広島社会科」に求められるのだろうか。その背景には、大きく二つの理由が考えられる。

第一に、広島に住む人々の願いとの関わりである。広島は、被爆という壊滅的な被害を受けながら、人々の尽力によって国際平和文化都市として見事に復興を果たし、これまで世界に平和を訴えてきた歴史的な土壌がある。広島子どもたちには、「ヒロシマを受け継ぎ、地球的視野で考え、相互の基本的な人権を尊重し、よりよい人間社会の創造のために貢献し、国際社会に通用する社会人になるとともに、地域で平和のために汗を流せる人になってほしい」という戦後変わらぬ願いがあるからである。

第二に、子どもたちがこれからの時代を生きていくために必要な力との関わりである。子どもたちが社会に出る10年後、20年後、グローバル化や高度情報化など社会が急速に変化することによる問題や課題、また環境破壊や飢餓などの地球規模的な問題などがさらに深刻さを増すと考えられる。こうした中で、共通の目的に向かって異なる他者と関わりながら、知恵を出し合い、平和でよりよい社会を創造していく力の育成が求められているからである。

また、これらの力は、広島県が行った調査や国際学力調査などの結果から広島子どもたちが不足している力と指摘されてもいる。

3 「広島社会科」が育てる子どもの姿

このような力を身に付けた子どもの姿として、平和記念式典における「平和への誓い」を紹介したい。

平成19年8月6日、小学校6年生の代表の児童は、原爆の悲惨さを訴えた後、「しかし、原爆によって失われなかったものがあります。それは、生きる希望です。」と述べた。また、「平和な世界をつくるためには、『憎しみ』や『悲しみ』の連鎖を、自分のところで断ち切る強さと優しさがが必要です。」そして、文化や歴史の違いを超えて、お互いを認め合い、相手の気持ちを考えを知ることが大切です。」と続けている。そして、最後に「私たちは、あの日苦しんでいた人たちを助けることはできませんが、未来の人たちを助けることはできるのです。私たちは、ヒロシマを『遠い昔の話』にはしません。」と結んでいる。

また、平成23年には、東日本大震災の被害と原爆の悲惨さを重ね合わせた後、「わたしたち一人一人は、だれもがみな大切な存在です。」、「戦争を始めるのは人間です。人間の力で起こさないようにできるはずです。」と力強く述べた。また、「未来をつくるのは人間です。喜びや悲しみを分かち合い、あきらめないで進めば、必ず夢や希望が生まれます。」と続けている。そして、最後に「わたしたちは、人間の力を信じています。人間は、相手を思いやり、支え合うことができます。人間は、お互いを理解し合い、平和の大切さを伝え合うことができます。わたしたちは、今を生きる人間として、夢と希望があふれる未来をつくるために、行動していくことを誓います。」と結んでいる。

「平和への誓い」には、戦争や原爆、災害等の事実を知るだけでなく、その背景を熟

考し、自分なりの考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えようとすることの重要性を世界に伝えており、また、そのような生き方を貫いていくという決意を示している。この力は、人間として普遍的に大切なものであり、これこそが「広島社会科」で育てたい子ども像である。

このような広島の子どもたちを育てていくために、私たち「広島社会科」を志す教師は、まず「広島・ヒロシマ・広島」のアイデンティティーを貫く必要があるのではないだろうか。そして地域の特徴を生かし、地域とつながり、人々の営みに学ぶことを通して、未来に希望を見出すことができる社会科教育を創造していく必要があるのではないだろうか。

今回の研究主題の設定は、これまで広島教師たちが築き上げてきた「広島社会科」を継承しつつ、社会認識の形成と公民的資質の育成とはどういうことで、それはどうすれば実現できるのかを探る実践研究を進めるために提起するものである。

<引用・参考文献>

- 広島市小学校教育研究会社会科部会『広島社会科 第37集論説』，平成20年
- 広島市教育委員会『広島らしい新しい教育推進のために』，平成12年
- 広島市教育委員会『平和への誓い』，平成19年，平成23年